

まちづくり研究所 2019 年度までの活動より

山家京子* 上野正也** 中井邦夫* 石田敏明* 内田青蔵* 曾我部昌史*

須崎文代** 吉岡寛之** 田野耕平** 重村力*** 丸山美紀**** 長谷川 明**** 鈴木 成也****

Reports from the Activities of Town Planning Institute until 2019

Kyoko YAMAGA* Masaya Ueno** Kunio NAKAI* Toshiaki ISHIDA* Seizo UCHIDA* Masashi SOGABE*

Fumiyo SUZAKI** Hiroyuki YOSHIOKA** Kouhei TANO** Tsutomu SHIGEMURA*** Miki Maruyama**** Akira Hasegawa**** Naruya SUZUKI****

1. 弘明寺商店街の遊休不動産活用／山家京子・上野正也

横浜市南区弘明寺商店街は、横浜最古の寺院「弘明寺」の門前に位置する商店街である。中央に大岡川が貫流し、桜の名所としても有名である。当該地域においてオンデザイン(設計事務所)、泰有社(不動産会社)と協働し、遊休不動産の活用に向けた実験的取り組みを行った。



図1 弘明寺商店街の位置と周辺の町割り

1-1. まちびらきイベント「One Day Open!!」

当該地域における基礎調査を実施した後、商店街組織との意見交換を経て、2017年10月7日に1日限定のイベントを実施した。当該イベントは遊休不動産の活用可能性を探ることを目的としている。その構成として、まず、元商業ビルの2,3階(以下、A施設)をアートや模型作り等のワークショップを行うスペースとして開いた。また、別の不動産1階(以下、B施設1F)は、弘明寺に対する思いを来街者へのインタビューにより集めた「私が思う弘明寺」の制作・展示を行った。そして、これら2つの会場をつなぐように、地域商店の魅力を発信するボードを制作し配置した。

これらを通じて、A施設は、アート制作やものづくりなどによる活用の有効性を確認した。また、B施設1Fは、商店街中央部の路面

という特性から、活動に対する注目度や視認性の高さが確認できた。さらには、当該地域に住まう方々は、単なる消費の場としての商店街利用に留まらず、多様な関わり合いを有しながら生活している実態を把握することができた。



図2(左) アートWS 図3(中)「私が思う弘明寺」例
図4(右) 地域商店の特徴を記したインフォメーションボード

1-2. 国際交流ワークショップを通じた建築操作・空間介入

次に、2018年5月23日から31日にかけてタイ・モンクット王工科大学トンプリー校(本学卒業の西堀隆氏が講師を務める)との国際交流ワークショップを実施した。前回のイベントを踏まえ、A施設はものづくりスペースとして活用し、B施設1Fは建築操作の対象、2Fはタイ学生の滞在場所として活用した。

学生は、タイ・日本混合で複数のチームに分かれ、フィールドワークを実施し、各国学生が持つ視点の違いなどを発見しながら協働体制を構築し制作を行った。

最終的に次の4つの作品が完成した。1)街の風景を切り取る望遠鏡「まちの断片集積所」、2)商店街における生活の痕跡を集めた「個の生活の痕跡」、3)建物と建物のすき間に空を反射させた「ボーッとすき間」、4)建物のファサードに凹凸ミラーを付け、反射によって新しい風景を作り出す「でこ、ぼこ、パキッ」(B施設1F)。なお、上記1)~3)は最終日のみの展示であったが、4)に関してはその後5ヶ月間にわたって展示を継続した。

これらを通じて、学生同士の交流はもとより、制作過程において地域住民等とのコミュニケーションが生まれ、活動が許容・認知されるなど、当該地域の寛容性を認識することができた。また、商店街という実空間において新しい建築表現を試みることができた。

1-3. 以後の展開

以上の活動を経て、B施設2Fはシェアハウス(水谷基地)として

* 教授 建築学科

Professor, Dept. of Architecture

** 特別助教 建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture

*** 客員教授 工学研究所

Guest Professor, Research Institute for Engineering

**** 特別研究員 工学研究所

Research Fellow, Research Institute for Engineering

稼働しており、また、その1Fは小商いをを行うスペースとなるなど、不動産活用が進んでいる。今後は、これら活用に合わせて大学との連携が模索されている。



図5 制作風景(A施設)



図6 でこ、ぼこ、パキッ(B施設1F)

2. 防火建築帯を活かした魚津中央通り名店街活性化プロジェクト ／中井邦夫

建築学科中井研究室では、戦後復興期に全国の都市に建設された防火建築帯についての調査研究ならびに、それらの建物を活かした町づくりの提案を推進している。そのなかで、2014年から富山県魚津市に残る中央通り名店街の防火建築帯(図7)に関する調査研究¹⁾を始め、現在、同防火建築帯の一面を実際に改修する計画を、地域関係者ならびに魚津市地域おこし協力隊と共同で進めている。



図7 魚津中央通り名店街の防火建築帯 外観(部分)

富山県東部新川地方の主要都市である魚津市は、14世紀前半頃には魚津城が築かれ、北国街道の宿場町としても栄え、現在人口4万人あまりの小都市である。中央通り名店街は、旧市街地である魚津城跡地周辺地区と、1960年代以降開発された魚津駅周辺地区をつなぐ通りに位置し、かつては市内の中心的繁華街を形成していた。同名店街の防火建築帯は、1956(昭和31)年9月10日に起きた魚津大火からの復興事業の一環として建設され、1959(昭和34)年4月20日に完成した。

そもそも「防火建築帯」とは、この魚津大火に先立つ1952年に、日本の都市不燃化を目指して制定された耐火建築促進法に基づく沿道型の耐火建築群を指し、全国80都市以上に建設された。これらのなかでも魚津中央通り名店街の防火建築帯は、1)約750mの道の両側計1.5kmにおよぶ長大な規模、2)全国各地の防火建築帯設計に携わった建築家、今泉善一による完成度の高いデザイン、3)建築当時の姿がよく残されている歴史的建築物としての価値、などの特

徴を有し、築後60年以上を経て全国の防火建築帯の多くが取り壊されていくなかで、建築史的、都市開発史的な重要性のみならず、戦後日本の地方都市の復興と発展のプロセスを後世に伝える意味でも貴重な建物である。

しかし他の地方都市同様、魚津市でも旧中心市街地の衰退が進み、中央通り名店街も閉まった店舗や空室が目立つ状況となっている。2016年に魚津市の助成を受けて本学大学院生らが立案した名店街全体の活性化計画(図8)²⁾制作時における所有者の方々へのヒアリングからは、空室を活用の方法がわからない、あるいは資金がない、または活用自体にあまり関心がないなどといった理由で活用が進んでいないことがわかった。



図8(左) 大学院生らによる活性化計画の地域住民への発表会(2016.9)

図9(右) フローティングフレームスタジオ(丹羽貴行修士論文、2020.2)

そこで本研究室では、こうした地域の雰囲気自体を変えるために、長屋式建物の空き区画のひとつ(RC造3階建て、延床面積約130㎡)を確保し、1)改修計画の立案、2)セルフ・デザインビルドでの改修、3)運営プログラムの立案を通して、商店街の活性化に寄与するプロジェクトを推進している。具体的には、2019年夏に当該区画を確保し、当時大学院生だった丹羽貴行君のプロジェクトとして、同区画の再生計画の立案と1階部分のセルフビルドでの改修を実施し、彼の修士論文(図9)³⁾としてまとめた。これに引き続き、2020年春以降、区画全体の改修計画を、魚津市地域おこし協力隊員として市職員となった丹羽君との共同にて立案し、秋から施工を実施している。1階は地域に開かれた多目的スペース、2、3階は住居として、当面は同隊員が2階に住みながら改修を進めつつ、同商店街の関係者の方々ならびに当研究室と共同しつつ1階スペースの運営と商店街の活性化計画推進を行う予定である。将来的には2、3階をゲストハウスとして運営することも想定している。

以上のような具体的な実践を通して、貴重な歴史的、空間的資産である防火建築帯を活かした同名店街の活性化によるまちづくりを目指している。

注)

- 1)原誠、中井邦夫、岡田啓佑「魚津市中央通りの防火帯建築を含む街区の構成(1)、(2)」、2015年日本建築学会大会(関東)学術講演梗概集(建築歴史・意匠)、pp.447-450、2015.9
- 2)中井研究室、「BA/横浜防火帯建築研究 No.10+11、魚津特別号、魚津中央通り名店街防火建築帯」、2017.8
- 3)丹羽貴行「フローティングフレームスタジオー自主設計施工による既存の躯体や部材をいかした多目的スペースの提案」、2019年度神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻修士論文、優秀賞、2020.2